

研究ノート

現代内モンゴルの社会主義市場経済下における 牛の飼い方と売り方

— ホルチン・モンゴル人の事例から —

Methods of Cattle Breeding and Marketing under Socialist Market Economy in Contemporary Inner Mongolia:

A Study of Khorchin Mongolians

青山 (フフアクラ)

(東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程)

QINGSHAN

(Graduate School of Environmental Studies, Tohoku University)

キーワード: 内モンゴル、ホルチン・モンゴル人、牧畜、家畜管理、家畜取引

Keywords: Inner Mongolia; Khorchin Mongolians; pastoralism; livestock management; Livestock Trading

目 次

1. はじめに
2. ホルチン・モンゴル人と家畜環境
 - 2.1 社会と環境
 - 2.2 農牧生業
3. 家畜売却取引
 - 3.1 家畜のサイクルと現金獲得
 - 3.2 牛の飼育と売却の目的
 - 3.3 「ローヘル」の存在
 - 3.4 家畜取引への対応
4. 家畜取引と家畜管理の関わり
5. おわりに

1. はじめに

モンゴル牧畜経営の特徴として、「去勢オス畜が多いこと」と「多種類の家畜を併用すること」が挙げられる。この群れの中で去勢オスの多いことは、経営上、商品化の度合いが低いことを反映しており、その意味で、自給性が高いことを反映している [小長谷2007: 36]。これらの去勢オスが役畜や食料として「軍事に寄与していた」¹とされている [小長谷2013: 93]。とくに去勢オスの多さという点では、定住化が進行した内モンゴルとモンゴルに共通していた。しかし、市場経済が浸透する現代では、商品化が進んでおり、去勢オスの割合が減る傾向にある。言い換えれば、メスの割合が高くなりつつある [小長谷2013: 92]。一方、社会主義の集団化を経て、市場経済化を経験しつつある内モンゴルでは、筆者の2012年から2017年までの調査によれば、人々は家畜としてメスを中心に飼育するようになっており、現金を獲得するためオスやメスに関わらずに売却していた。本来なら、牧畜民は家畜の増殖を図ってメスの家畜を売却することや屠ることはあまりみられないことはいうまでもない。そのため筆者は、人々はなぜメスの家畜を中心に飼育するようになったのか、人々はなぜ家畜をオスとメスに拘わらず売却するようになったのかという問題意識をもって、社会主義市場経済化に直面する「ホルチン・モンゴル人」²の家畜売却取引に着目し、人々の牧畜経営の変化を議論したい。

モンゴル牧畜民社会研究の中、市場経済下における家畜取引を取り扱った研究は一定の蓄積がある。たとえば、小長谷は、社会主義集団経済から市場経済の移行期であった1988年に、内モンゴルの牧畜区域とされるシリングル盟で調査を行い、モンゴル牧畜民の馬牧畜における捕捉、剪毛、烙印などの作業と牧畜民の市場経済に組み込まれた動向などを議論している。とくに興味深いのは、馬群における種オスを中心とするワン・マイル・ユニットをとりあげ、人々は馬の群れを分割するため、ワン・マイル・ユニットの核になっていた種オスを売却し、その代わりに他の種オスを購入して新たなワン・マイル・ユニットを作り出すことで馬群を管理する方法を指摘している [小長谷1989]。同論文で指摘した家畜取引による家畜管理は、現在の「ホルチン地域」³にもみられる。ただし、それらの家畜取引における目的には違いがある。シリングルのほうは、ワン・マイル・ユニットという馬群をコントロールすることを目的とした家畜取引である。一方、ホルチンのほうは、牛群の拡大を抑制することを目的とした家畜取引である。しかし、いずれにしても、家畜取引を利用した家畜の管理である。なお、小長谷論文では家畜取引のプロセスや人々の家畜取引への対応は言及されていない。

一方、児玉は、1996年に内モンゴルのバヤンノール盟ウラト旗で調査を行い、都市住民となったモンゴル族の一家族の住食と経済生活を考察した。その中で牧畜民たちは、肉を中心とした食生活をなくして、ゲルを固定家屋に変化させ、それによって草原の牧畜社会と都市社会、漢族社会を結

¹ 歴史上名高い「絹馬貿易」などは、自らの軍事力を低下させない程度に、その余分を交易に回していた事例である [小長谷2013: 93]。

² 「ホルチン・モンゴル人」とは、内モンゴル・ホルチン地域在住の牧畜のみならず農耕も行うモンゴル人を指す。

³ 「ホルチン」とは、中華人民共和国成立後は、現在の通遼市を中心に、その両側に位置する赤峰市とヒンガン盟をまとめて指す地域の呼称である [ボルジギン・ブレンサイン2003: 2-3]。

びつけるような、より広範な社会的ネットワークを形成して市場経済に取り込んでいる文化的社会的変容を明らかにした。また、同論文では、都市住民となったモンゴル族の経済活動となる車と家畜の仲買業をとりあげ、仲買人の家畜を買い取るプロセスと、市場経済化により牧畜民の生活に現金が必要になっていること、牧畜民は家畜を売却することにより現金を獲得していることについて言及されている [児玉2000]。なお、同論文は、牧畜民は仲買人を介して家畜を売却するかたちで現金を獲得していることを明らかにしたが、牧畜民の家畜取引への対応については言及されていない。そのため、同論文は人々の市場経済下における家畜取引について十分に考察したものとは言い難い。

このような市場経済化を経験しつつある牧畜民たちは、2003年の「禁牧政策」⁴の実施を契機に、定住化や農耕化にさらされ、家畜飼育において作物飼料に依存するようになってきている [鄭2018]。したがって、現在、内モンゴルではその東西を問わず、ほぼ全域の牧畜民は農牧業に従事するようになっていくことがわかる。そこで、本研究では、従来の家畜取引に関する研究を踏まえて、内モンゴル東部におけるホルチン地域を事例に、人々の家畜取引に焦点をあてて、牧畜民の家畜売却取引の実態とその家畜管理との関わりを再検討することを通じて、現代内モンゴル牧畜民の牧畜経営の変化を明らかにすることを目的とする。

本研究では、文化人類学的な参与観察、聞き取り調査などの方法を用いて、ホルチン・モンゴル人の家畜取引の実態や家畜売却に対する対応、家畜管理を把握することを重視した。筆者は、2012年2月から2017年10月にかけて6回にわたるフィールドワークを行い、内モンゴルのホルチン左翼後旗に、合計233日間滞在し、85人にインタビューを実施した。家畜取引については、合計23人にインタビューし、家畜取引の現場で参与観察を行って資料を収集した。本研究ではとくに、2016年4月27日から2016年6月28日までのフィールドデータと2017年9月6日から2017年10月26日までのフィールドデータをもとに検討する。

2. ホルチン・モンゴル人と家畜環境

2.1 社会と環境

「内モンゴル・ホルチン地域」⁵には、1790年代ごろ内地の漢族農民が入植しはじめたとされる [郭1980 : 19]。内モンゴル東部における農耕地開発は、とくに清朝末期に推進され [汪1980 : 67]、この蒙地開墾によって漢人農民が殺到し、それに伴って牧地の狭溢化現象が生じた [ボルジギン・ブレンサイン2003 : 2]。ホルチンの牧畜民は、この時期の蒙地開墾により遊牧生活様式を放棄し、定住しながら農業を行うようになった [色音1998 : 113]。ホルチン・モンゴル人たちはとくに1949年の中華人民共和国成立以来、激しい社会環境の変化を経験してきた。1958年に人民公社が設立されたが、1960年代ではホルチンの農耕地面積はさらに拡大された [黄2009 : 143]。その後1980年代の改革開放により人民公社が解散されるとともに、生産責任制が導入され、1982年には正式に家畜の私有化と土地の分配が実施された [郝・包2010 : 82]。この結果、1990年代には、内モンゴル自治区全

⁴ 本研究では、2003年から内モンゴルで施行された退牧還草政策に伴う「禁牧」「休牧」「区画輪牧」などの家畜の放牧に制限をかける政策を一括して「禁牧政策」と呼ぶ。

⁵ 内モンゴル全体のモンゴル人の約70%がホルチン地域に暮らしている [SIRIGULENG2016 : 102]。

体の家畜飼育頭数や農耕地が増加する一方、砂漠化の進行は深刻さを増した。家畜頭数が増加することに留まらず、牧草地を開墾して農耕地も拡大し、これらの過放牧や開墾などが原因で砂漠化、草原退化などの大きな問題がもたらされた[巴図2006]。その砂漠化、黄砂による被害が中国の持続発展に大きな課題をもたらした。そのため、生態環境の回復を目的とした「退耕還林・退牧還草」政策が2003年から施行され、それに伴い内モンゴルでは、「禁牧政策」などが実施された[ネメフジャルガル2006、阿拉坦沙2009]。それに伴い、ホルチン地域には家畜の放牧が一定期間によって制限され、家畜の舎飼いが推進された。その後2014年から2016年にかけて自治区規模のインフラ整備のプロジェクト「十個全覆盖」が行われ、各村および各世帯の道路から庭先にいたるまでにコンクリートが敷き詰められるようになった。

このように様々な環境の変化に直面してきた内モンゴル・ホルチン地域のモンゴル人は、1990年代から人口や家畜の増加、農耕地拡大などによる砂漠化、牧草地の縮小などの社会変化が生じ、家畜の飼料として主に作物を利用するようになった[青山2018]。また環境回復を目的とした禁牧政策により、家畜の放牧が一定期間によって制限され、家畜の飼育に放牧と舎飼いが組み合わされるようになっている。本研究では、中国内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼後旗バヤンソムのモンゴル人集団居住地であるエメン「村」⁶を事例としてとりあげる。

ホルチン左翼後旗は内モンゴルの東南部に位置し、面積は11,535km²、海拔200-500mの台地が広



【図1】 エメン村の地理的位置 [科爾沁左翼後旗誌編纂委員会 1993：208を基に作成]。

⁶ 内モンゴルでは、現在行政組織として上から自治区、市(盟)、旗(県)、ソム(鎮)、行政村(ガチャー)、小組などのレベルがあり、エメン村は一番下の小組に当たる。エメン村は、ホルチン左翼後旗の北西部に位置し、バヤンソム所在地から北東1kmに位置する。

がるホルチン砂漠地域の一部であり、固定砂丘や半固定砂丘、それらに囲まれた平地の草原などからなる。大陸性気候を特徴とし、年平均気温は5.3℃から5.9℃、年平均降水量は358mmから483mm[科爾沁左翼後旗誌編纂委員会1993:131-133]である。ホルチン左翼後旗は「ホルチン黄牛の里」とよばれるほど牛が有名で、1世帯あたり平均2頭が飼育されている。人口は40.1万人でその73.9%をモンゴル族が占める[科爾沁左翼後旗誌編纂委員会2008:12]。この地域では、1950年代から牛の品種改良がはじめられ、1980年代に、モンゴル牛と三河牛の交雑種をもとにシメンタール種と交雑して、自然気候に適した新しい品種の赤(黄)白まだらのホルチン牛が育てられることとなった[科爾沁左翼後旗誌編纂委員会1993:253]。

このホルチン左翼後旗内にあるエメン村の人口は、「183人(漢族2)、57世帯(漢族1世帯)」⁷(2017年調査時)であり、家畜を飼育していないのは5世帯のみである。村の面積は約2,400ha、その内農耕地面積は350ha、牧草地面積は1,200ha、林地面積は70ha、その他は780haを占める。村では家畜が1,099頭飼育されており、その内訳は牛が825頭、羊・山羊が259頭、馬が15頭である。村には299.3haの作物が栽培され、そのうちトウモロコシが188.5ha、サイレージ専用トウモロコシが93.2ha、黒豆が14.6ha、小豆が3haそれぞれ栽培されていた。

2.2 農牧生業

本節では、前節に取り上げたエメン村における人々の農牧業についてみておきたい。モンゴル遊牧の対象となるのは五種類の家畜、すなわち羊、山羊、牛、ウマ、ラクダである。もちろん地域に応じて分布は均しくない[小長谷1997:71]。これらの五畜の総称をモンゴル語で「マル(mal)」と呼ぶ。しかし、現在、エメン村のモンゴル人は、主に牛と羊を飼育している。前述したように、牛の頭数が圧倒的に多く、全家畜の7割以上を占め、羊は2割程度であるそのためこの地域でマル(mal)というとき、それは牛を指すようになっている。

現在、エメン村における家畜飼育のあり方としては放牧と畜舎飼いが組み合わされている。表1に示したように、禁牧期の3月から7月までを除き、他の時期には全ての家畜が放牧可能である。しかし、牧民たちには自分なりの飼育方法があり、自分の都合により放牧と畜舎飼いを組み合わせて飼育することはこの地域の一つの特徴である。家畜の飼料は、夏の時期は牧草地に生える草、冬期は草刈で得た乾草が一般的である。だが、エメン村においては、採草地の消失などを原因に草刈りはほぼしないため、冬期は家畜にトウモロコシの茎葉或いはトウモロコシの「サイレージ」⁸を食べ

【表1】季節ごとの家畜飼育方法 [2017年の調査により作成]

季節		春			夏			秋			冬	
		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
時期		放牧禁止時期					放牧可能時期					
飼養家畜	雄牛	舎飼い					放牧・舎飼い			舎飼い		
	雌牛						放牧			舎飼い・放牧		
	羊・山羊						放牧			舎飼い・放牧		
	馬						放牧			舎飼い・放牧		

⁷ 行政登録上に、移住者などを含めて74世帯、228人になっている。

⁸ サイレージとは、新鮮な飼料作物や牧草などを材料とし、乳酸菌の発酵を利用して作製された家畜の貯蔵飼

させる。また家畜全般にトウモロコシ実粉を食べさせ、牛や羊、山羊には専門的な化学配合飼料も食べさせる。そして人工授精による品種改良が行われた「ホルチン牛」は主として乳牛ではなく肉牛として飼育されている。

次に、エメン村における農業のあり方についてみておきたい。内モンゴル東部のモンゴル族は遊牧民の農法であるナマクターリア農耕を定住生活以前よりおこなってきた〔吉田2007：272〕。しかし、漢族の入植と早期に漢族に開墾された土地のモンゴル人の移住・開墾以降は、漢族の農業技術を身につけ、除草や施肥といった定住を前提とした農業をやるようになったという〔色音1998：214-215〕。現在エメン村の人々は、地下水による灌漑を行い、農業用の機械を利用したより集約的な農業を行っている。作物はトウモロコシの栽培が中心である。前述したように、作物の栽培面からみると、トウモロコシは6割以上を占め、サイレージ専用のトウモロコシは3割以上を占めている。トウモロコシの栽培における作業暦は表2に示した通りである。トウモロコシは生産性が高く、また茎葉や実を禁牧時期や越冬のために家畜の主たる飼料とすることができる。

〔表2〕 トウモロコシの作業暦〔調査により作成〕

農作業	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
肥料・種子の準備	■											
牛糞肥料入れ	■											■
播種					■							
農業散布					■	■						
除草						■	■					
追肥						■	■					
灌漑					■							
収穫									■	■		
飼料作製									■	■		
作物の出荷	■											■
畑の片付け	■										■	■

以上、ホルチン・モンゴル人たちが様々な自然・社会環境の変化を経験して家畜飼育が作物飼料に依存するようになり、放牧と舎飼いを組み合わせるようになったことを紹介した。続いて彼らの市場経済下における家畜取引について検討したい。

3. 家畜売却取引

3.1 家畜のサイクルと現金獲得

社会主義中国的な市場経済化に直面している内モンゴル自治区ホルチン地域は、従来のような自給自足の生活様式を送ることはできなくなった。農牧業用コスト、日常生活、食料、病気の治療費、学費、結婚式の費用などのあらゆる生活の場面において現金を必要とするようになり、「その現金の多くを家畜と作物の売却から得ている」⁹。以下ではホルチン・モンゴル人の主な現金収入源である家畜の売却取引に注目したい。

料である〔蔡2009：273〕。

⁹ その他の現金入手手段としては出稼ぎか、商売に頼っている。

2017年に実施した調査からは、エメン村の12世帯における家畜飼育頭数と出産頭数、売却頭数が明らかになった。12世帯で飼育された牛は220頭であり、一世帯あたり18.3頭が飼育されている。この年の春に、94頭（一世帯あたり7.8頭）生まれる一方、売却された牛は80頭（一世帯あたり6.6頭）だった。またバヤンソムの統計データによれば、エメン村が所属するモドガチャー [図2] では、2016年時点で2,624頭牛が飼育され、その内繁殖母牛が1,452頭であった。「繁殖母牛」¹⁰が牛の半数以上を占め、オス牛や子牛と比べ多く飼われていることを踏まえれば、ホルチンでは繁殖率の高い母牛を中心に飼育し、出産された子牛の売却によって、群れの数維持していることが推察される。

この家畜サイクルがホルチン・モンゴル人1世帯の収入全体にしめる割合はきわめて大きい。表3はエメン村に生活している57世帯の内、牛の出産頭数、売却頭数、売却価格、そして作物栽培面積を把握することができた5世帯をまとめたものである。ここで牛1頭あたりの売却平均価格は6,500元以上となっており、その売却収入の合計は、農業収入の2倍を上回っている。ホルチン・モンゴル人の年間収入において、家畜売却収入が主な現金収入源になっていることが確認される。

【表3】 エメン村における人々の農牧業収入の比較 [聞き取り調査により作成]

世帯	人口	飼育牛 の数	作物栽培面積 (ha)		農業収入			牧畜収入		
			サイレージ 専用トウモ ロコシ	トウモ ロコシ	1haの生産 量 (kg)	単価 (元)	農業収 入 (元)	売却数	単価 (元)	牧畜収 入 (元)
ダナ	4	20	2	2			15,600	5	8,000	40,000
ザーナ	3	23	5	0			0	4	7,500	30,000
サイン	3	22	2	1.5	6500	1.2	11,700	3	6,500	19,500
テボン	4	20	1.4	2.3			17,940	6	7,000	42,000
アゴラ	3	27	4	3.5			22,750	11	7,000	77,000

以上で確認されたホルチン・モンゴル人の牛飼育の概要について次節では牛の飼育やその売却の目的についてエメン村の人々の語りから光を当ててみたい。

3.2 牛の飼育と売却の目的

市場経済化が急速に導入されつつある内モンゴルにおいて、近代的耐久消費財が草原の牧民の生活に急速に普及しつつある。しかしこうした近代機器を購入するためには、牧民は家畜、畜産物を売って現金を入手している [児玉2000: 298]。これらの先行研究と対比するとき、ホルチン・モンゴル人の家畜取引は、牛の売却により現金を入手することと、牛群を拡大させずに数を抑制するという特徴がある。繁殖母牛の数をできる限り維持した上で、老いた雌と子牛をオスメス関わらずに売却する。ホルチン・モンゴル人の場合は、子牛と老いた雌が現金の収入源になっているのである。以下では、牛を飼育する理由およびその売却の目的について事例を挙げながら検討したい。

エメン村では、作物飼料に依存しながら牛を飼育し、その売却によって現金を得るという経済的な側面が見られる。「牛は現金である」という家畜飼育に対する価値観は市場経済化以前には見られ

¹⁰ バヤンソムにおいて、2011年では、牛の繁殖率が83%に達していた。[ホルチン左翼後旗档案局編2012: 306]。なお、2013年にホルチン左翼後旗に57.5万頭のホルチン牛が飼育されていた [通遼市委員会史志事務室編2014: 17]。

なかったものである。これらについて、村人の話からから考察しよう。

【事例1】 チンゲル氏、男、39歳、小学校卒業。妻と中学生の娘、小学生の息子との四人家族。牛を26頭飼育し、トウモロコシを5ha、サイレージ専用のトウモロコシを3ha栽培している。この地域では牛を飼育したほうが農業よりも収入が大きく、子牛を一頭出産させそれを売却してから得る収入も少なくない。トウモロコシを栽培するのは家畜の飼料を得るためという（2016年6月4日の談話）。

【事例2】 アゴラ氏、男、48歳。高校卒業。軍隊に勤務する息子と妻からなる3人家族。牛を27頭飼育し、作物としてサイレージ専用トウモロコシを4ha、トウモロコシを3.5ha栽培している。現在牛を飼育しているのは現金を獲得するためであり〔写真1〕、母牛から「tul-i ni abuna（子を取り）」、古いメスとともに売却し、繁殖母牛だけを維持すればいいという。また、家畜を愛して売らないという、我々モンゴル人の考えは時代遅れだという（2017年10月21日の談話）。



【写真1】子牛の買い取りによる現金の引き渡し〔2017年9月21日撮影〕

このようにホルチンでは、繁殖母牛を飼育し、生まれた子牛を売却すること＝「子取り」が主たる家畜管理の方法であることが推察される。そうして産まれた子牛を売却するという、出産率を考えながら現金収入を増やしていることが読み取れる。また家畜飼育の主たる目的は、現金獲得であり、事例2に指摘したように、飼育した家畜を愛して売らないという価値観はもう時代遅れという考え方が見られる。この飼育目的と価値観の変化が人々の家畜売却を促している一つの要素になっていると思われる。子牛の売却は、現金獲得以外に、群れの拡大を抑制するという目的もある。このことについて、農牧業に従事するある女性の話から見てよう。

【事例3】 トヤー氏、女性、44歳、高校卒業。役人の夫と高校生の娘からなる3人家族。牛を26頭飼育し、トウモロコシを1.5ha栽培し、サイレージ専用トウモロコシを3ha栽培している。彼女の話によると、今年は10頭売却する予定だという。毎年売却しているが、牛を20頭以上飼育することはで

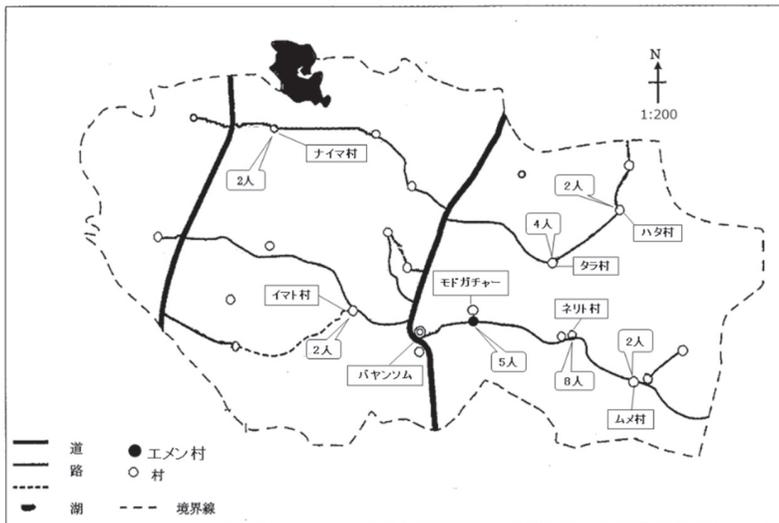
きないという (2017年3月3日の談話)。

ここで「牛を20頭以上に飼育することができない」ということ背景には、家畜の畜舎飼いによる労働負担の増加、作物飼料の不足といった大規模飼育の困難な理由がある。それゆえ牛を1年に1頭出産させて、その子牛を売却し、群れの拡大を抑制しているのである。

以上、市場経済化に直面しているホルチン・モンゴル人たちについて、牧畜収入が農業収入より上回ることで、牛は「現金」という飼育の価値観をもっていることを明らかにした。また家畜の畜舎飼いによる労働負担の増加と作物飼料の不足といった背景により、牛飼育の規模を拡大させずに繁殖率を上げ、繁殖母牛を1年に1頭出産させ、その子牛を売却することによって現金を獲得する「子取り戦略」を取り、小規模飼育という制限のなかで利益を最大化していることが推測できた。

3.3 「ローヘル」の存在

牛の売却と取引にかかわる重要な人々について述べておく必要がある。児玉は、牧畜民の家畜は牧畜民自ら売りに行くことはなく、ほぼ仲買人を介して売買されると報告している (児玉2000: 294)。ここで指摘した仲買人をホルチンでは「ローヘル (loher)」と呼ばれる。ホルチン・モンゴル人の多くは、ローヘルに牛を売却し、牛を買い取ったローヘルがその後家畜市場に売却する。ホルチン地域では、生産地は家畜市場から遠く、牧畜民はトラックを保有していないために、庭先から売却するケースが多い。以下ではこの仲買人が介在する家畜の取引に焦点を当てて記述する。



【図2】 バヤンソムに存在するローヘルの一部 [バヤンソムの行政地図に加筆]

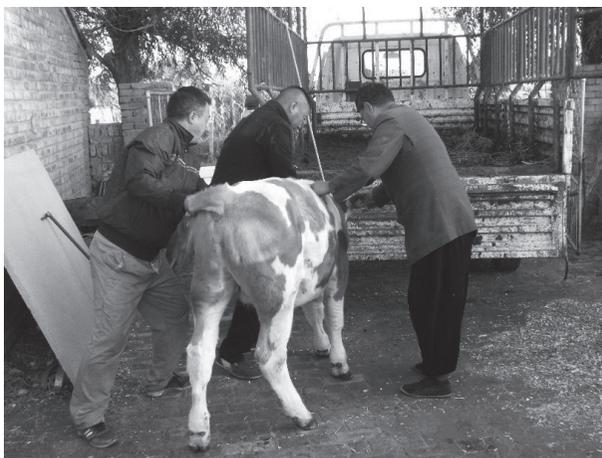
ホルチン地域におけるローヘルの中には、農牧業に従事しながら仲買業を営んでいるものも多い。彼らは地域の各村から牛を買い取り、市場に売却する。しばしば市場から市場への取引も担い彼らは、漢族からは「老客儿 (lao ke er)」、「客儿 (ke er)」と呼ばれている。ローヘルにはモンゴル族

と漢族両方存在しており、性別も様々である。ローヘルには、トラックと資金を持ち、漢語を話せ、長年の経験と市場の取引相場から価格を判定する能力があることが必要である。彼らの多くは、牛の体格をみて将来性を把握し、色や角の大きさなどを見ながら値段の交渉ができる。エメン村が所属するバヤンソムは、東西に約35km、南北に約25kmの面積がある。この小さな地域にすら、図2に示したように、25人のローヘルがいる。

3.4 家畜取引への対応

ホルチン地域では、牛の飼育は小規模な世帯経営であり、家畜の売却に仲買人を介在する取引を行う。そのため人々は自分の利益を確保することを重視し、出来る限り牛を、高値売りをしようと様々な売却方法を模索してきた。以下では仲買人を通じて庭先から牛を売却する取引に焦点を当て、モンゴル人が牛を、高値売りをしようとする行動や取引実態について、売り手、取引現場、買い手の三つの側面から検討したい。

【事例4】 チチゲ氏、50代、女性、高校卒業。電力会社員の夫と大学生の娘からなる3人家族。トウモロコシを3ha、サイレージ専用トウモロコシを0.8ha栽培している。牛を8頭飼育している。生まれて6ヶ月のオス子牛を平均8,400円で2頭をローヘルのパト氏に売却し、トラックに積んでいたところに出くわし〔写真2〕、インタビューを行った。先日、ローヘルであるパト氏が来たときには8,300円の価格が提示されたという。そのときに8,500元はくだらないかと思っていたので売却しなかった。けれどもその後他のローヘルに見てもらったところ、この牛が8,300元にも届かなかった、今日8,400元を提示されたため売却したという（2017年9月19日の談話）。



【写真2】売却された子牛の積み込み〔2017年9月19日撮影〕

この事例からは、他人の子牛の売却価格と見比べながら相場を推定し、何度もローヘルに見せて推定価格と一番近い時に売却すること、常に家畜市場の価格を観察し相場を把握しようと試みていることがわかる。頻繁にトラックで庭先まで買い取りに訪れ、交渉するローヘルとどのような取引

がなされているのだろうか。次の事例から見てみよう。

【事例5】 アゴラ氏 (事例2と同じ人物) と「蒙漢族ローヘル組」¹¹の取引現場「写真3」

漢族のローヘルはアゴラ氏が売りたい10頭の子牛を柵外から回りながらみて、群れの中から一番気になった子牛を指して、「あれはいくら？」と漢語で聞く。アゴラ氏は「単独では売らない、ここにいるものを全部まとめて売る」と漢語で回答した。するとローヘルは「全部は買えない」と言い、その場を離れた (2017年9月21日の談話)。



【写真3】 子牛の取引現場における交渉 [2017年9月21日撮影]

【事例6】 ダライ氏、男性、45歳、中学校卒業。妻と大学生の息子からなる3人家族。牛を11頭飼育している。ローヘルに牛を売ることも、またローヘルとして牛を買い取ることもある。サイレージ専用トウモロコシを1ha、トウモロコシを4ha栽培している。牛を売る時は最低2-5人に見せると彼はいう。把握している市場の価格まで可能な限り引き上げさせ売却する。最近は牛の買い取り交渉があまりうまくいっていないという。牛を買うときはトラックで各村を回るが、ガソリンが無駄になることが多い。利益率がよくないため、多くの牛を買い取り、利益を確保しようとしているという (2017年10月21日の談話)。

上記二つの例からは、牛を一頭以上に売却する際、一頭単位ではなくまとめて売り買いする実態を見取ることができる。またローヘルに牛を売る際には、ローヘルに2-5回見せ、市場価格と見比べながらできるだけ大きな利得を得ようと試みていることがわかる。ローヘルとの取引においてホルチン・モンゴル人は、仲買人を介したシステムのなかで、自分の利益を最大化しようと熟練した駆け引きを行うのである。

¹¹ 「蒙漢族ローヘル組」は、外地のモンゴル族と漢族からなるローヘル組。40代の男性で構成されるこの蒙漢族ローヘル組はエメン村の隣村の人と同行している。同行の人は情報を電話あるいは交流サイトで収集して、ローヘルが来たら売りたい人の家まで案内していた。

以上、ここで挙げた牛の売却取引に関する事例をまとめておきたい。ホルチン・モンゴル人たちは牛を売る際に、市場価格を把握し、他の売却された子牛との比較により相場を推定している。また何度もローヘルに見せ交渉しながら、大きな牛や小さな牛をまとめて売却することで利益を確保し、推定価格に一番近い時に売却するよう試みている。ホルチン・モンゴル人の多くは、小規模な世帯経営の牧畜を行うために、家畜の取引に仲買人が必要であり、熟練した交渉能力が求められる。そして市場経済下における人々は、現金獲得と群れの数を抑制する管理により、ローヘルを介した取引になっていること解釈できる。

4. 家畜売却取引と家畜管理の関わり

冒頭の先行研究で、市場経済が浸透する現代は家畜の商品化によって、従来の「去勢オス畜が多いこと」からメスの家畜が多いことに変化しつつあると報告されている [小長谷2013]。この市場経済に伴う家畜の商品化によって家畜群れにおけるメス畜の数が増えることは、本研究の3.1で指摘した繁殖母牛が牛群の半数以上を占めていることにより確認された。このことから、市場経済下における内モンゴルでは、従来のモンゴル牧畜経営の特徴だった「去勢オス畜が多いこと」は失われたことをわかる。

また、市場経済化により牧畜民の生活に現金が必要になり、人びとは仲買人を介して家畜を売却するかたちで現金を獲得していると指摘されている [児玉2000]。この牧畜民が仲買人を介して家畜を売却し、現金を獲得していることはホルチン地域でも行われている。しかし、児玉 [2000] の研究で牧畜民の家畜取引への対応については言及されてこなかった。それで、本研究では、牧畜民の家畜取引への対応として、他人の子牛の売却価格と見比べながら相場を推定し、何度もローヘルに見せて推定価格と一番近い時に売却すること (事例4)、牛を一頭以上売却する際に、一頭単位ではなくまとめて売り買いうる実態 (事例5) などを明らかにした。また、市場経済と禁牧政策への対策として家畜の繁殖率をあげて「子取り戦略」をとっていることを解明した。

一方、牧畜民は市場経済化に伴う家畜の商品化に従って、馬の群れを分割するため、ワン・マイル・ユニットの核になっていた種オスを売却し、その代わりに他の種オスを購入して新たなワン・マイル・ユニットを作り出すようなかたちで市場を利用して馬群を管理していることが指摘されている [小長谷1989]。このような市場を利用した家畜管理としてホルチン地域では牛を売却して牛群の拡大を抑制していることが見られる。いずれにしても、市場を利用する家畜の取引によって家畜を管理していることは共通している。ただし、それらの家畜取引における目的や管理する家畜種には違いがある。シリングルのほうは、ワン・マイル・ユニットという馬群をコントロールすることを目的とした馬の取引である。一方、ホルチンのほうは、現金を獲得することと、牛群の拡大を抑制する (事例1-3) ことを目的とした牛の取引である。そのため、市場経済下におけるホルチン・モンゴル人は家畜の取引によって家畜を管理していることがわかる。

5. おわりに

ホルチン・モンゴル人は、人口や家畜の増加、農耕地拡大などによる砂漠化や牧草地の縮小などの社会現象に対応するかたちで、近年家畜の飼料として作物を利用するようになった。また「禁牧」政策の実施に伴い家畜の畜舎飼いを余儀なくされるなかで、労働負担の増加、作物飼料不足といった問題をうけ、家畜群れの拡大を抑えることとなった〔青山2017、2018〕。こうした背景のもとホルチン・モンゴル人は、群れの数を増加させずに利益を最大化する方法として、母牛に一年一頭出産させ、その子牛を売却することで、現金を獲得し利益を最大化する「子取り戦略」を取るようになった。この「子取り戦略」は、家畜の群れの拡大を抑制するための重要なカギである。家畜の売却時に、人々は市場経済下の家畜取引への対応として、他人の子牛の売却価格と見比べながら相場を推定し、何度もローヘルに見せて推定価格と一番近い時に売却する方法と、牛を一頭以上売却する際に、一頭単位ではなくまとめて売り買いする方法を戦略的にとっている。市場経済下におけるホルチン・モンゴル人はローヘルを介在する家畜売却取引により、1歳未満の子牛と老いたメスを売却し、家畜の飼育頭数を抑制し、家畜の群れを維持する新たな家畜管理法を創り出したのである。

梅棹は1940年代に内モンゴルの牧畜地域で現地調査を行い、モンゴルの牧畜は、ただ増やすための牧畜であり、人間と家畜共同体の繁栄を望んだ牧畜〔梅棹1996：144〕であると述べた。当時のモンゴル人は積極的に家畜を売却していなかった。また、人民公社時代の家畜飼育は、個人所有が存在しない、粗放的な牧畜であり、個人による売却も存在しなかった。本研究は先行研究と調査地点が異なる、だがモンゴル人の牧畜という観点からは、最低限の比較基盤があると思われる。本研究の事例研究から得られた知見は次のことである。中国の社会主義市場経済化に直面するホルチン・モンゴル人の家畜飼育は、農業に依存した集約的な牧畜になった。また、ホルチン・モンゴル人の「牛は現金」であるという意識や、「子取り」のための家畜飼育という価値観の変化が見られた。そして、牧畜経営において、メス畜を中心に飼育し、家畜の売却によって群れを維持するなどの極めて大きな変化を経験している。

その結果、ホルチン・モンゴル人は、市場経済化と禁牧政策への対策として家畜の繁殖率をあげて家畜売却により家畜の飼育頭数を抑えながら現金を獲得する「子取り戦略」を取るようになった。ここまで分析してきた家畜売却による家畜管理を通じて、現代内モンゴル牧畜民の牧畜経営の変化と生業文化の変容を捉えることは牧畜研究において新たな視点といえよう。

参考文献

〔日本語文献〕

青山(2017)「なぜ家畜飼育と農耕を共に擦るのか—内モンゴルの定住牧畜民の事例から」『生態人類学会ニューズレター』No.22、pp.41-45。

同(2018)「内モンゴルの家畜飼育道具から見る農牧複合—牧畜民の物質文化と生業の変化」『東北アジア研究』No.22、pp.79-110。

阿拉坦沙(2009)「(退耕還林条例)下の牧畜経営の現状と課題」『農業経営研究』No.47(1)、pp.134-139。

- 梅棹忠夫(1996)『梅棹忠夫著者集2 モンゴル研究』中央公論社。
- 児玉香菜子(2000)「現代都市モンゴル族の文化変容と社会経済的動態—中国内モンゴルにおけるある都市民
モンゴル族の暮らしから」『沙漠研究』No.10(4)、pp.287-300。
- 小長谷有紀(1989)「モンゴル族、ウマのたてがみ切り—男たちが大地を揺るがした日」『季刊民族学』No.13(3)、
pp.23-33。
- 同(1997)「いざない」小長谷有紀編『アジア読本—モンゴル』河出書房新社、pp.7-10。
- 同(2007)「モンゴル牧畜システムの特徴と変容」『E-journal GEO』No.2(1)、pp.34-42。
- 同(2013)「モンゴルにおける遊牧—その特徴がしめす現代的変容」佐藤洋一郎編『イエローベルトの環境史
—サヘルからシルクロードへ』弘文堂、pp.88-97。
- 蔡義民(2009)「サイレージ発酵品質の分析・評価法(1)」『畜産の研究』No.63(2)、pp.273-276。
- 淡野明彦、淡野寧彦(2011)「中国内モンゴル自治区における「退牧還草」政策による牧畜(遊牧)業の変化に
関する考察」『奈良教育大学紀要』No.60、pp.42-62。
- ネメフジャルガル(2006)「内モンゴル自治区における「禁牧」政策に関する一考察」『経済学研究論集』No.30、
pp.23-48。
- 巴図(2006)「内モンゴルにおける牧畜経営と農種農業」『横浜国際社会科学研究所』No.11(3)、pp.369-391。
- ボルジギン・ブレンサイン(2003)『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房。
- 吉田順一(2007)「内モンゴル東部における伝統農耕と漢族式農耕の受容」モンゴル研究所編『近現代内モンゴ
ル東部の変容』雄山閣、pp.272-294。
- SIRIGULENG(2016)「ホルチン・モンゴル人の儀礼食——ホルチン左翼後旗を中心に」『人文社会科学研究所』
No.32、pp.101-120。

〔中国語文献〕

- 郭松義(1990)「清代人口流動与边疆開發」馬汝珩・馬大正編『清代边疆開發研究』中国社会科学出版社 pp.10-
51。
- 郝亞明、包智明(2010)『体制政策与蒙古鄉村社会變遷』中央民族大学出版社。
- 科爾沁左翼後旗誌編纂委員会(1993)『科爾沁左翼後旗誌』内蒙古人民出版社。
- 同(2008)『科爾沁左翼後旗誌1989～2007』内蒙古文化出版社。
- 科爾沁左翼後旗档案局編(2013)『科爾沁左翼後旗年鑑2012』通遼宏誠印務有限公司。
- 色音(1998)『内蒙古遊牧社会變遷』内蒙古人民出版社。
- 汪炳明(1990)「清代人口流動与边疆開發」馬汝珩・馬大正編『清代边疆開發研究』中国社会科学出版社 pp.52-
86。
- 通遼市委員会史志事務室編(2014)『通遼市情—数字看通遼(2014)』通遼市委員会史志事務室。
- 黄健英(2009)『北方農牧交錯帶變遷—对蒙古族經濟文化類型的影響』中央民族大学出版社。
- 鄭宏(2018)『草原的逻辑 续(下)—牧区田野調查筆記』民族出版社。

SUMMARY

Significant research on livestock herd management have focused on trading and commercialization under a market economy. However, few studies have analyzed livestock managements as a response to trading conditions. The study explores how the Khorchin Mongolians who were engaged in the complex subsistence of agriculture and stock raising under the socialist market economy, managed their livestock on the base of the trading. It examines the changes of livestock managements carried out by Inner Mongolia herdsman and the characteristics of the livestock breeding.

Natural and social changes, such as desertization and shrinking of meadowland since the 1990s, the expansion of croplands, as well as the policy of banning grazing have obliged Khorchin Mongolians to combine grazing and captive breeding. This trend has resulted into an increasing demand for fodder. The increase of captive breeding has brought about a shortage of feed and increased labor. To confront these difficulties, the Khorchin Mongolians have applied a new livestock management technique, called the ‘Child Removal Strategy’ or the systematic selling of a calf, which has successfully limited the scale of cattle herds and raised their annual livestock income.

謝辞

本論文は、「富士ゼロックス株式会社小林基金」2016年度在日外国人留学生研究助成、「一般財団法人 東北開発記念財団」平成28年度海外派遣援助、「一般財団法人 東北開発記念財団」平成29年度外国人留学生修学援助金の研究助成を受けて行われた現地調査に基づく研究成果である。指導教官の高倉教授と人類学ゼミの先生方とゼミの皆様の御協力の賜物にほかならない。また、2名の匿名の査読者からは有益なコメントと多大な励ましを受けた。みなさまの御支援・御協力に感謝したい。